Twinkle 東京女子医科大学学術リポジトリ

Title	(未来医学事典)ME機器取扱説明書と未来医学
Author(s)	高山, 待子
Journal	未来医学, 未来医学(1):48-49, 1985
URL	http://hdl.handle.net/10470/11174

Twinkle:Tokyo Women's Medical University - Information & Knowledge Database.
http://ir.twmu.ac.jp/dspace/

未来医学事典

ME機器取扱説明書と未来医学

現状では、ME機器の取扱説明書（以下、説明書）は、全く読まれていないようだ。これは、何もME機器に限らず、一般家庭電気製品の説明書にしても同じだ。その結果として、取り扱いミスによる事故は後を断たない。メーカー側では、誤操作をしても事故につながらない安全な機器を作ることはもちろんだが取り扱いミスを無くすために、説明書は必要不可欠なものであり、十分読んでもらいたいと思っている。そのために、編集者としては写真やイラストを増やした『わかりやすい』『見やすい』説明書作りを目ざしているのである。

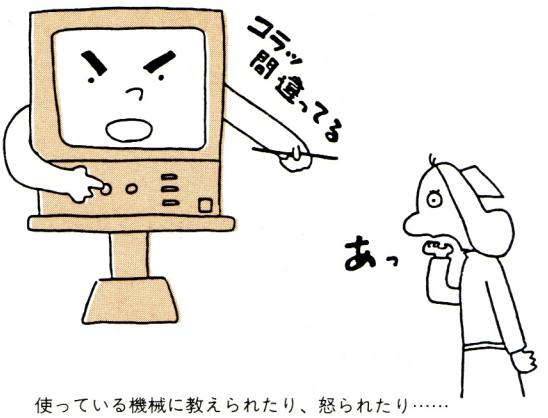
最近では、スライドやＶＴＲが利用され、「読む説明書」から「見る説明書」へと変わってきている。これは、機器の機能や取り扱いの概略を知るのに大変有効な手段だ。特に、トランスデューサや電極の装着方法などは、写真やイラストよりはるかに効果がある。また、画像処理装置などは、ＶＴＲによる説明で一目瞭然となる。しかし、これらにも欠点がないわけではない。細かいところまで説明すると、どうしても長時間になってしまう。「読む説明書」はオペレータが目次、索引などを利用して必要な部分を抜粋できるが、「見る説明書」ではそれがままならない。もちろん、ビデオディスクを使用すればよいが、製作に多額の費用がかかるし、再生するためには高価な機材を用意しなければならない。

本当に説明書はいらなくなるのか

最近では、マイクロコンピュータ内臓のME機器が続々開発されている。このマイクロコン

説明書は使う前に必ず読んでほしい

日本光電工業(株)
高山 待子（2期生）



使っている機械に教えられたり、怒られたり……

ピュータの採用は、ME機器を大きく二分するのではないかと思われる。一つは、ツマミ、スイッチ類を極端に少なくした、ワンタッチ操作の機器で、他の細部の設定などは、内蔵のコンピュータが自動的にコントロールしてしまう機器である。他は、得られたデータをもとにして、オンラインまたはオフラインでオペレータの意のままに各種の操作を行うような機器である。こうした機器では、説明書の様式も現在とは全く異なったものになるであろう。

前者のタイプの機器の説明書はいたって簡単である。いや、説明書などいらないかも知れない。操作するスイッチのそばに、『1.押す。2.右へ倒す。…』といった表示があれば十分である。電源スイッチをオンにすると、美しい声で、『初めは…。次に…』といった指示が聞こえて来るような機器も出てくるであろう。

後者のタイプの機器では、ディスプレイを持っていれば、そこに操作方法が順次表示され、オペレータは次のステップを自由に選べば良いのである。装置には学習機能が備わっていて、オペレータIDなるものを入力すると、過去の操作ミスのデータを読み出してきて、ミスを犯した操作のところへ来ると警告を発して、注意を喚起させるような、「取扱説明書内蔵」の機器も出てくるであろう。

こうなれば、よほどのことでもない限り取り扱いミスや操作ミスは発生しなくなる。しかし、緊急時などにはどうであろうか。いちいちステップを踏まなければ目的とするところへ達することができないのでは、一分一秒を争う緊急検査などには、何ともやっかいな代物になり下がってしまうのである。

必要なわかりやすく、見やすい説明書

理想的には、『これこれをやれ』と言えば、たちどころにその指示通りのことが行われるといった「音声入力」可能な、全自動化機器であろう。こうなると、もはやロボットである。つまり、人間と同等、いやそれ以上の知識を持った、柔軟な思考をするコンピュータを内蔵したロボットが、人間の指示を受けるとあとは自分の判断で条件設定や処理を行っていくのである。こうなれば、もう説明書など全く不要と考えられる。

けれど、ロボットが故障したり狂ったらどうするか。やはり、人間がその原因を調べて、正常な状態に戻さなければならないのである。

つまり、このようなときのためにも、『取扱説明書』はやはり必要なのである。未来になっても、取扱説明書は無くなってしまうものではないのだ。そこで、説明書作りに携わっているものは、今まで通り、いや今からでも遅くはないから、『わかりやすい』『見やすい』取扱説明書作りに励まなければならないのである。